

聖書：ローマ 11：11～24

説教題：野生種のオリーブ

日時：2016年3月6日（朝拝）

このところ毎回最初に申し上げていますが、ローマ書9～11章で扱われているテーマは「イスラエルの不信仰」という問題です。イスラエルは神の民として旧約で中心的な位置を占めて来た人々です。また約束の救い主への信仰に向けて備えられて来た人々です。その彼らは、いざ救い主が現れた時、この方を受け入れませんでした。そしてイエス・キリストの教会に連なっていません。この問題をどう考えたら良いのかということです。11章で論じられていることは、神は民族としてのイスラエルを捨ててしまわれたのかということです。1節：「すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。」パウロはこれに対して「絶対にそんなことはありません」と言います。神がなおイスラエルをご自分の民として導いて行かれる方法について前回二つのことが語られました。一つは「残された者」を残すことによつてです。エリヤが「あなたに忠実な者はもう私一人しかいません！」と語った時、主は言われました。「バアルにひざをかがめていない者をわたしは7000人残してある」と。人間の目で見えていかに絶望的な状況がそこにあっても、神が信じる者たちを恵みにより、残していてくださるということでした。そしてもう一つの方法は実に不思議なものでした。7節からのところに、神は福音を受け入れないユダヤ人をかたくなにしたことが語られました。彼らへのさばきとして、益々彼らをかたくなにし、救いの道に戻って来れないようにされた。しかしそこにさらなる目的を持っておられたことが今日の箇所でも明らかにされます。

11～12節に、神の導きに関して三つの段階のあることが示されています。その第一段階は、イスラエルの違反によつて救いが異邦人に及ぶという段階です。ユダヤ人が福音を退けて、異邦人にそれが宣べ伝えられるという図式は使徒の働きの中にたくさん見られます。パウロたちは新しい土地ではまずユダヤ人の会堂で宣教しましたが、そこにいたユダヤ人が拒否することによつて、福音は異邦人に語られました。しかしこれはイスラエルが救いから締め出されるためではありません。神のみわざの第二段階は、11節最後にあるように「イスラエルにねたみを起こさせるため」です。すなわち異邦人に神の祝福が豊かに注がれる様子を見て、ユダヤ人が妬み、自らその祝福を求めようになる。この結果、彼らの中からも悔い改め、福音を信じる者が起こされる。こうして福音の祝福は再びイスラエルに戻って来るの

です。12 節に「彼らの完成は」という言葉があります。この「完成」と訳されている言葉は「充満」とか「全体」とか「全量」という意味の言葉です。つまりこうしたプロセスを経てイスラエルの救われるべき人々がみな救われるという状態が起こるようになる。そしてさらにその続きがあります。第三段階として、イスラエルがこのように神に立ち返ることによって、世界全体に素晴らしい祝福がもたらされると 12 節で言われています。「もし彼らの違反が世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らの完成は、それ以上の、どんなにかすばらしいものを、もたらずことでしょう。」 神はこのようにイスラエルと異邦人の相関関係を通して世界の歴史を導かれるということがここに言われています。私たちはここに、この箇所を通してでないといけない神の歴史哲学、歴史の見通しを与えられるのです。

パウロは 13 節以降では、自分の務めとの関連で語ります。パウロは異邦人への使徒として召された人として、もちろんその務めを重んじています。しかし彼の働きは実はユダヤ人の救いとある種の関係を持っていた。それは今見たように、異邦人宣教の働きに励むなら、それは神によって同胞ユダヤ人たちのねたみを引き起させることに用いられるということです。パウロはこうして同胞の幾人かでも救うために仕えたいと言っています。彼は自分の異邦人宣教の働きが間接的にユダヤ人の救いにつながることを意識していたのです。その同胞への愛に突き動かされて異邦人宣教に励んでいた彼でもあったのです。

15 節には改めてこれまでのことがまとめられています。「もし彼らの捨てられることが世界の和解であるとしたら、彼らの受け入れられることは、死者の中から生き返ることではなくて何でしょう。」 イスラエルが神から捨てられることによって福音は世界に広がり、世界は神との和解の祝福にあずかりました。であるならイスラエルが再び神から受け入れられる時、さらに素晴らしい祝福が世界にもたらされることになる。それは「死者の中から生き返ること」と言われています。これはその時の祝福があまりにも素晴らしいため、それまでの状態が「死」にたとえられるということでしょう。死人が生き返る時のような、それまでとは比較にならない祝福が全世界に生じるようになる。これは御国の完成を表す聖書のもう一つの表現であると言えます。この流れ全体を見つめる時に、神はイスラエルを退けてはおられないことが分かるのです。この手紙が書かれた当時、イスラエルは絶望的な状態にあったとして、神はそこから驚くべき御心を実現して行かれるのです。

さてパウロは 16 節以降で、さらにイスラエルと異邦人の関係について語ります。ここになぜパウロがこのイスラエルの問題を長々と語って来たのか、その根本にあった問題が明らかにされています。まず 16 節：「初物が聖ければ、粉の全部が聖いのです。根が聖ければ、枝も聖いのです。」 「初物」とは収穫する麦粉の最初のもので、それは後に収穫されるものの保証です。この「初物」は具体的に何を指しているのでしょうか。それはイスラエルの初物であるアブラハム、イサク、ヤコブといった族長たちと考えられます。28 節でイスラエルのことが「父祖たちのゆえに愛されている者」と言われています。すなわちイスラエルの初物である族長たちが神に選び分かれたれ、聖められているから、後に続くイスラエル全体もそうであるということです。「根」も同じです。根である族長たちが聖ければ、そこから出る枝、後続のイスラエル全体も聖いのです。

そしてパウロは異邦人クリスチャンへのメッセージを語ります。三つのことを見ますが、一つ目にパウロは異邦人クリスチャンを「野生種のオリーブ」にたとえています。ここでは手入れがされていない状態で実を結ばないオリーブのことが考えられています。本来の私たちは神の庭の外にあって見向きもされず、ひどい悪条件のもとで、そのまま枯れて滅びるべき存在でした。しかし神が栽培する神の庭のイスラエルの枝が折られたため、その空いた所に私たちは接木されました。それによって私たちは今あるようにいのちを持ち、祝福を受ける存在となりました。このことを良く考えるなら、あなたは誇ることはできない！とパウロは言います。ここにローマの教会に、ある問題のあったことが伺われます。すなわち教会で多数を占めていた異邦人クリスチャンたちが少数者のユダヤ人に対して誇っていたということです。今や自分たちに神の祝福が多く注がれているからと言って、自分たちこそ主役であると考え、ユダヤ人を見下していた。19 節にあるように「枝が折られたのは、私がつぎ合わされるためだ、とあなたは言うでしょう」という考えを持っていた。その考えと態度を訂正することがこれらの話の眼目であったのです。パウロは異邦人クリスチャンたちに向かって言います。「あなたは誇ってはならない。誇ったとして、あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えているのです。」と。

これは聖書を理解する上で大切な視点を与えてくれる御言葉です。すなわち新約の教会は旧約のイスラエルの上に成り立っているということです。しばしば新約の

教会と旧約時代のイスラエルは別種のもと考えられています。旧約時代のイスラエルは民族的であり、血のつながりに基づく肉のイスラエルであるのに対し、新約の教会は霊的なイスラエルである。そしてこの新しいイスラエルによって古いイスラエルは置き換えられたのである、と。このように新約の教会と旧約のイスラエルは本質的に違うという見方から、幼児洗礼も否定されることとなります。しかしパウロがここで言っているように、両者の関係は置き換えではありません。旧約のイスラエルの根に新約の異邦人が接木されるのです。ですから旧約のイスラエルと新約の民は別々ではないのです。異邦人クリスチャンである私たちは旧約のイスラエルにとって代わって主役になったのではなく、むしろ旧約では御心によって一国に限定されていた神の民に加えられたのです。イスラエルの族長たちを根とするオリーブに接木されたのです。野生種のオリーブである私たちは、旧約から継続して存在する神の民、栽培種のオリーブに加えられたのです。加えられたということは、先にいた人々に支えられて、そこに入れてもらったということです。そういう者たちが先にいた人々を見下したり、高ぶったりするのはあまりにも無礼。むしろ私たちは根に支えられ、そこから養分を得ていることに感謝すべきなのです。

2つ目にパウロは「高ぶるのではなく、かえって恐れなさい」と言います。異邦人クリスチャンたちは、自分たちは神の祝福の中にあるから、もう安泰だと考えることはできません。先に枝としてとどまっていたイスラエルは不信仰のために切り落とされました。ですから正しくとどまっていなければ、あなたがたも切り落とされるのですよ！とパウロは言っているのです。21節にあるように、「神が台木の枝を惜しまれなかったとすれば、ましてやあなたのごことは惜しまれないでしょう。」と。ですから私たちは恐れを持たなければなりません。イスラエルの上を下った神の厳しさを見つめることによって。そして自分が今、生かされている神のいつくしみにとどまらなければなりません。いつくしみにとどまるとは、神がキリストにおいて差し出して下さった神の義を感謝して受け取り、これにより頼むことです。自分の行ないによらず、ただ神の恵みによって救われることに感謝して生きることです。その人は高ぶりとは無縁の人であるはずですが。ですからもし私たちが高ぶっているなら、それは恵みにとどまっていない証拠であって、いつ切り落とされてもおかしくない状態にあることを暗示しているのです。

三つ目にパウロが言っていることは、イスラエルも不信仰をやめれば回復されるということです。信仰に立ち返れば、神は彼らを再び継ぎ合わせることができます。

またそうするということが今日の箇所で言われて来ました。これは野生種のオリーブが接木されるよりももっとたやすい。なぜならイスラエルが回復されるのは、元の台木に接木されることだからです。性質が反していない、自分自身に接がれることだからです。こうして私たちは次回、いよいよ9～11章のクライマックスを見ることになります。それを見るなら、「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いかな！」と神に心からの頌栄をささげることしか私たちには残らなくなるのです。

今日のまとめとして二つのことにもう一度触れて終わりたいと思います。今日、学んだことの一つ目は神の驚くべき計画です。世界の歴史がこのように進むとは一体誰が私たちに教えることができるでしょう。ここで私たちが見るのは反ユダヤ主義の考えではありません。当時ユダヤ人は福音を拒絶していました。神の特権を全部捨てたかのようでした。しかしここに示されていることは神はイスラエルを確かに捨てられないということです。「神の賜物と召命とは変わることはない」(29節)。神はご自身の真実を現わしつつ、素晴らしい最後の状態を導いて行ってくださいませ。私たちはこのように歴史を導く神の下にある者たちです。

そしてもう一つは、私たち異邦人クリスチャンに勧められていることを心に留めることです。すなわち神のいつくしみときびしさを思うこと。私たちが今かくあるは、神の特別な恵みによることです。その私たちは決して高ぶってはならない。高ぶることといつくしみにとどまることは矛盾します。高ぶる人はいつ切り落とされるか分かりません。このことを畏れて、神のいつくしみにとどまることを自分の大切な課題にしたいのです。その時、それは自らの救いを確かにするだけではありません。私の祝福は、神によってイスラエルのねたみを引き起こし、彼らの救いの促進につながります。そしてさらに「死者の中から生き返ること」と言われる素晴らしい日が来ます。イスラエルも異邦人も一つの根につながれ、組み合わせられて、神をほめたたえる最後の栄光の日が来ます。その日を楽しみに待ち望んで、高ぶることなく、感謝して、神のいつくしみにとどまり続けるようにとパウロは私たちに語っているのです。